

ゾンビ論争を解きほぐす

前田高弘

私は、スワンプマンに関しては水本氏と意見を異にするが、ゾンビに関しては基本的に一致しており、それゆえ彼から昨年この問題に関して連名での発表を提案されたときも特に断る理由がなく、結果としてこの論争に巻き込まれることになった。今回この論争に白黒をつける(?)にあたり、改めて何が争点であるのかをはっきりさせたいと思う。

哲学的論争に限らないが、依拠するデータや論理的スキルなどに違いが認められない場合でも、見解の不一致が発生し持続することは珍しくない。このような「不一致」の存在そのものがはらむ問題を追究することが、認識論やその他の分野における近年の流行の一つとなっているが、この論争もこの角度から反省してみる価値はあるかもしれない。しかし、水本氏に対する三浦氏らの批判を改めて検討してみると、この論争に果たして本当の不一致が存在するのか怪しくなってくる。論争は往々にして、「不一致が存在することについて一致する (agree to disagree)」という形をとって一先ず終了するものだが、この論争では正確に何に関して一致しないのかが私には今一つ明らかではない。

まずそもそも、点滅論法が何を示そうとしているのかについて三浦氏はどのように理解しているのだろうか。彼は点滅論法の結論を「意識・クオリアの有無は、物理状態に論理的に付随する」としたうえで、「これが証明できたら、つまり単なる自然的付随性ではなく論理的付随性が証明されでもしたら、心の哲学の歴史上、最大の発見と言うべきだろう」(三浦 2011, p.115) と述べている。しかし私の理解では、点滅論法はそこまで野心的なことを目指しているわけではない。というのも、ゾンビの想定は志向的な心的状態が物理状態に論理的に付随することを前提しており、点滅論法もその前提に則っているからだ。つまり、点滅論法が示そうとしているのは、「もし志向的な心的状態が物理状態に論理的に付随するならば、意識・クオリアの有無も物理状態に論理的に付随する」ということである。そして、この結論自体は、点滅論法とは独立に心の哲学において主に志向説(表象説)の立場の人々によって支持されるように思われる。

また、三浦氏は「自然的付随性」というものをゾンビの思考実験における重要な制約条件として捉えており、柴田氏との連名による水本批判の中でも、「自然的付随性」に基づく可能世界の場合分けを怠っているとして水本氏を批判しているが、これも私には全く不可解である。恐らく三浦氏らはゾンビ問題を誤解しているか、あるいはいずれにせよ私や水本氏とはかなり異なる仕方で理解しているのではないかと疑われる。

私の理解では、ゾンビの思考実験において重要な制約条件となる付随性は物理的付随性であり、自然的付随性ではない。そもそも、ゾンビが論理的に可能であるとは、現実世界と物理的に全く同じでありながら意識・クオリアだけを欠く可能世界が存在するということである。だから、現実世界の自然法則がゾンビの出現を妨げるものである(その意味で現実世界では意識・クオリアは物理状態に付随する)としても、そのことはゾンビの論理的可能性にとって本質的ではない。本質的なことは、現実世界の物理法則がゾンビの出現を妨げる

ものではないということである。またそれゆえ、ゾンビ問題に関係する可能世界は現実世界と物理的に異なるところがなく、少なくとも意識・クオリアの部分を除くすべての事物（とりわけ志向的な心的状態）に関しては物理主義が通用する世界に限られる。（ゾンビが論理的に可能であるならば、自然法則が物理法則に付随しないことも論理的に可能である。）

だから例えば、以下のような文章を読むと、狐につままれたような気分になる。

「そして、「視野の半分のみが3秒ごとに点滅」などという想定が求められるとわかっているれば、二元論者ははじめから「自然的付随性の原理」に忠誠を誓う必要はなかったことになり、現象的には何でもありになって、ゾンビはますます可能性を高めるだけなのである。」（同書、p.118）

「視野の半分のみが3秒ごとに点滅」という想定を行う以前に、通常の哲学的ゾンビを想定する時点でゾンビ論者は「自然的付随性の原理」に忠誠を誓う必要はないだろう。忠誠を誓う必要があるのはあくまで「志向的な心的状態に関する物理的付随性の原理」である。

（現象的には何でもありになることが何か問題であるかのように述べられているが、ゾンビが可能であるとは結局そういうことではないのか？ もっとも、ゾンビの可能性にコミットしながら随伴現象説にコミットしない方法の一つとして、例えば因果的多重決定にコミットするならば「現象的には何でもあり」とはならないだろうが、三浦氏は随伴現象説を擁護する立場のはずである。また、「随伴現象説」を「物理的に全く変化をもたらすことなくこの世界からクオリアの部分だけをすべて取り去ることは論理的に可能である」という立場として定義するならば、ゾンビの可能性にコミットすることは随伴現象説にコミットすることに等しい。いずれにせよ、ゾンビが可能であるなら、少なくとも「視野の半分のみが3秒ごとに点滅するゾンビ」のような部分的ゾンビが可能である程度に「現象的には何でもあり」となるだろう。）

ところで、すぐ上に引いた文章でもほのめかされているように、三浦氏は「視野の半分のみ点滅」と「全面的な点滅」を根本的に異なるものと見なしている。確かに、「視野の半分のみ点滅」と違って「全面的な点滅」の場合では、三浦氏が行っているように、現象的記憶は当の時点における物理状態に付随するという根拠にして、点滅論法の中の「クオリアが点滅したならば、クオリアの点滅は気付かれることが可能である」という部分を否定することにより、矛盾を回避することができるように思われる。もっとも、この点については多分、水本氏にも言い分があるだろうし、このあたりに本当の不一致が少なくとも一つ存在するのかもしれない。しかしそれは、ゾンビに関するものというより、記憶の物理的基盤に関するものである。また水本氏自身が指摘するように、「全面的な点滅」の例にこだわる必要はない。さらに言えば、「点滅」にこだわる必要すらないのだ。

私の理解では、点滅論法の本質的な論点にとって「点滅」は必要ではないし、むしろ記憶や時間的意識などに関する問題を巻き込むことによって本質的な論点から注意をそらす恐れがあるので好ましくない。肝心なことは、クオリアがある状態とない状態との違いに気付くことができるかどうかであるから、例えば、視野の半分だけクオリアが点滅することなく端的に欠けているような「半視野ゾンビ」でも構わない。（念のために注意しておく、クオリアが欠けている部分の視野は何も見えないわけではない。ゾンビ論者のように、志向性

と現象的意識が完全に分離可能であると考えれば、クオリアが欠けている部分はクオリアに満ちている部分と機能的には全く同じようにものが「見えている」。そこで、話を単純にするため、均一に照らされた均一な色の壁が「半視野ゾンビ」（このゾンビの視野は非対称な形で半分だけクオリアを欠くとする）の視野いっぱい広がっているとしよう（真っ白な霧に包まれている状況を想像してもよい）。このとき、「半視野ゾンビ」の目の前に広がる光景は上下左右完全に対称だが、その視覚経験は現象的には非対称であろう。そうすると、点滅論法は以下のような論証に置き換えられる。

- 1' . ゾンビは可能である（帰謬法の仮定）
- 2' . ゾンビが可能であるならば、視野の半分だけクオリアを欠くことも可能である
- 3' . 視野の半分だけクオリアを欠いたならば、視覚的な現象的非対称は気付かれることはあり得ない
- 4' . 視野の半分だけクオリアを欠いたならば、視覚的な現象的非対称は気付かれることが可能である
- 5' . ゆえに、視覚的な現象的非対称は気付かれることはあり得ず、かつ気付かれることが可能である（1', 2', 3', 4' より）
- 6' . ゆえに、ゾンビは不可能である（1', 5' より）

この論証に対する反応として、随伴現象説を擁護するゾンビ論者であれば、4' を否定するのが常道であろう。3' は随伴現象説から帰結すると考えられるからだ。随伴現象説によれば、クオリアは物理的な因果効力を欠く随伴現象に過ぎないから、この世界からクオリアの部分すべて取り去ったとしても、物理的には全く変化をもたらさない（そもそもゾンビが可能であるとは、クオリアをそのような仕方で除去することが可能であるということだ）。そうであれば、視野の半分だけクオリアを取り去ったとしても、やはり物理的には全く変化をもたらさないだろう。そして、物理的な変化が生じなければ、物理状態に付随する志向的な心的状態（気付きも含まれる）にも変化が生じないはずである。

ところが、三浦氏は4'ではなく3'を否定するようである。（三浦氏は半赤ゾンビ（クオリアに満ちた通常の視野のうち赤クオリアの部分だけ点滅するゾンビ）について、残りの視野との非対称的対照ゆえに点滅が気付かれると述べているから、同様に半視野ゾンビについても現象的非対称は気付かれると認めるだろう。）これは一見して奇妙に思われる。しかし、彼がこのような反応を選ぶのは、一つには「随伴現象説」についての理解が幾分異なることによるのかもしれない。以下の文章はそのことを示唆する。

「半赤ゾンビのような部分的ゾンビを想定した時点で、点滅論者は、随伴現象説を実質的に背理法の仮定から解除し、二元論のうち「自然的付随性の原理」に従わない学説を迎え入れたことになる。限りなく心身並行説に近い状況を許してしまっているのだ。」（同書、p.117、下線引用者）

半視野ゾンビも部分的ゾンビの一種だが、なぜ部分的ゾンビを想定することが随伴現象説を実質的に背理法の仮定から解除することになるのか、前後の文章を読んでも私にはよく分からなかった。三浦氏が擁護する随伴現象説とはいったいどのような立場なのだろうか。

また、いずれにせよ三浦氏が4'ではなく3'を否定するならば、「気付き」の意味も問題に

なってくる。常識的に考えれば、気付きは志向的な心の作用であるから、もしゾンビが現象的非対称に気付いてしまえば、「志向的な心的状態に関する物理的付随性の原理」が破られることになる。この点について、三浦氏は多分「現象的気づき」と「機能的気づき」の区別に訴えて対処するのだろうが、この区別もまた私を困惑させる。彼によれば、ここでの「気付き」はあくまで「現象的気づき」であって「機能的気づき」ではないということになるのだろうが、この区別がここで役に立つようには見えない。確かに、気付きには、意識・クオリアを伴わない純粋に機能的な種類のものがある（それゆえ「現象的気づき」なしの「機能的気づき」はあり得る）と考えられるが、「現象的気づき」は必ず「機能的気づき」を伴うように思われる。例えば、以下は半赤ゾンビについての三浦氏のコメントである。

「半赤ゾンビは、内面的に「うわあ、赤がチカチカしてやがる。なんだよこれ、冗談じゃねえ、落ち着かないぞ、点滅を止めてくれえ！」と戸惑いまくるだろう。しかしその戸惑いは、振る舞いなどの物理的機能にはまったく影響しない。」（同書、p.116）

私には、心の中で日本語を操ることや、点滅に戸惑うといったことはすぐれて志向的な心的状態／出来事であるように思われる。例えば、点滅に戸惑うという心的出来事は、眼科医に相談するといった行動的アウトプットと潜在的なつながりがあり、逆にもしそういった行動的アウトプットとの潜在的なつながりが（健常者と物理的に全く変わらないのに）原理的に断たれているならば、そのようなものを「戸惑い」とは認めがたい。

このように、この論争ではいくつかの基本的なタームについて双方の理解が一致していないように思われる。そのため話がかみ合わず、不毛な争いになっているのではないかと危惧する。このワークショップで不毛な争いに終止符が打たれることを期待したい。

文献

三浦俊彦 2011 「クオリアの点滅」『論理パラドクシカ』二見書房 pp.109-118.

三浦俊彦・柴田正良 2011 「点滅論法」の誤謬について『科学哲学』44-1 pp.91-93.